

原井 一郎著

### 南島ポートピール

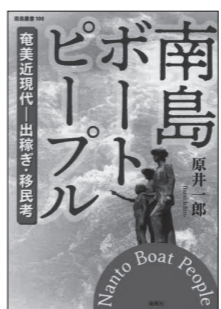
奄美近現代——出稼ぎ・移民考

「そつだ難民しよう  
ー」、難民がまるで自分  
の生きる道を自由に選択  
できるかのように揶揄し  
たキャッチコピーが飛び  
交い、貧しい地域から厄  
介者が転がり込むかのよ  
うな目を向ける新自由主  
義の世界、本書はこの世  
界を深部から告発する。

奄美群島の島民はその  
ように移民・出稼ぎをし  
たのではない、島民は、  
江戸時代の植民地統治策  
による黒糖生産のモノカ  
ルチャーによって債務奴  
隷化され、災害・飢饉・  
疫病の受難に陥り、みず  
からの生活基盤を奪われ、島から脱出するほか  
生きるすべがない状態に  
追いやられた「ポートピ  
ール」なのだ。そして  
そのポートピールが渡  
航先の九州、関西・東京  
の港湾・炭鉱・紡績工場  
などの労働現場と生活現  
場で、さげすまれ、虐げ  
られ、過酷な労働を強い  
られて呻吟する。本書  
は、この南島のひとびと  
の苦悩を自分史（著者は  
サンフランシスコ平和条  
約直後の一九五四年に四

国徳島から母の故郷で  
ある奄美大島に転居し、  
その地で地元日報の記  
者を務めたジャーナリス  
トである）と重ね合わせ  
てたどった故郷への哀切  
に満ちた挽歌である。  
一七世紀末に薩摩藩が  
藩の財源の基盤として奄  
美群島に黒糖の生産を強  
制する。貧窮化した島民  
は借金を負って豪農の債  
務奴隷となり、病苦や餓  
死の道をたどる。明治維  
新以降も、砂糖商人によ  
る収奪で借金つけとな  
り、「ソテツ地獄」の赤  
貧の暮らしを強いられ  
る。  
植民地統治によって島  
の自律した暮らし（サブ  
シテンス経済）を破壊  
された貧民が、明治末か  
ら流民化し、九州・関西  
・関東の日本列島各地、  
さらには海外に出稼ぎ・  
移民を余儀なくされる。  
第一章では、台風・干  
ばつ・悪疫で生き地獄と  
なった与論島の島民が、  
一八九九年に長崎県の口  
之津港に半強制的に集団  
移住させられ、そこで港  
から運び出す石炭荷役の

過酷な労働や三池炭鉱の  
採掘労働に従事する過程  
で味わった苦悩の経験が  
資料や聞き取りを通して  
鬼気迫る筆致で語られ  
る。



A 5判・320頁・2640円  
海風社  
978-4-87616-069-3  
TEL. 06-6541-1807

する。島民の流民先は、  
日本列島だけではない。  
ブラジル、南洋群島、台  
湾、中国大陸各地への移  
住が進められる。帝国日  
本の植民地主義政策の先

兵として植民地先に移住  
した奄美島民は、敗戦時  
に非業の集団死を強いら  
れる。

奄美群島のほぼ一世紀  
にわたる移民・出稼ぎの  
通史をその原因となった  
島の黒糖の収奪史もふく  
めて描き切った作品は類  
書を見ない。数少ない貴  
重な文献資料を丹念に渉  
猟するだけでなく、苦難  
の直接体験者からも丁寧  
な聞き取りをする。

本書は奄美群島の出稼ぎ  
・移民の歴史をたどるこ  
とによって、植民地主義  
とは何か、という普遍的  
なテーマを掘り下げる視  
座をも提示している。奄  
美群島民が経験した黒糖  
地獄は、近代に先立つ薩  
摩藩の藩政と豪農による  
債務奴隷制のもたらした  
ものであるが、著者はこ  
の歴史を、イギリス資本  
主義の発展の重要な契機  
となった奴隷制にもとづ  
く砂糖産業の発展の歴史  
に重なる。日本の植民地  
主義は、国外の植民地統  
治による収奪だけでなく、  
国内の周辺部の奴隷制  
による収奪によっても  
組織された。そして島の

暮らしを破壊された島民  
が移民先で同じく植民地  
主義的な社会関係の下に  
置かれ、差別・迫害と収  
奪を受ける。ここにも  
日本資本主義が植民地主  
義的な労使関係によって  
資本蓄積を推進する構図  
が浮かび上がる。  
さらに帝国日本の総動員  
政策に領導された島民の  
海外移民は、米軍の激し  
い攻撃の前に、日本兵と  
の共死を強いられ、移民  
先での非業な死を招く。  
植民地主義を資本主義の  
発展過程と不可分に深化  
する重層的で複合的な共  
進化の過程としてとらえ  
る著者のこのような視座  
は、植民地主義を資本主  
義の歴史、あるいは特定  
の歴史的事象に限定する  
とらえ方に根本的な反省  
を迫る。  
著者は奄美群島の「ポ  
ートピール」の歴史を  
受難の歴史として描くだ  
けではない。その歴史を  
生きる個人に焦点を当て  
て、この受難を引き受け  
つつ脱植民地主義の社会  
を創造しようとする  
ひとびとの生の営みを描  
いてもいる。  
神戸市長田区で奄美・  
琉球民謡の普及活動を続  
ける岩城吉成、加計呂麻  
島出身で沖繩・奄美の島  
唄を路上ライブで歌い続  
ける牧志徳、釜ヶ崎で被  
爆者や失業者の写真を撮  
り続けた砂守勝巳、釜ヶ  
崎で流民に伝道を続ける  
徳之島出身の牧師の榮一  
仰、産別労組の関西生コ  
ンの労働運動を立ち上げ  
た徳之島出身の武建一な  
どである。関西生コンの  
労働運動がたちあげた大  
阪労働学校を運営してい  
る評者としては、武建一  
の個人史の生きざまから  
見えてくる労働運動の深  
い社会的歴史的意義を感  
得できたことはきわめて  
意義深い。生コン産業の  
労働者と中小企業経営者  
を連帯のきずなで結びゼ  
ネコンやセメントの大手  
資本と対峙して産業の民  
主化を追求するこの労働  
運動が植民地主義と不可  
分に結びつきこんだちも  
なお新自由主義という名  
で社会の破局を招いてい  
る資本主義を根拠から問  
い直す脱植民地主義の社  
会闘争であることを本書  
は語りだしているからで  
ある。  
本書は、奄美諸島の移  
民通史を通して植民地概  
念を刷新した書として、  
移民史研究という学問領  
域を超えて、近代世界を  
根源から問い直し、この  
世界が深刻な人類的規模  
の危機を抱えている現状  
に向き合おうとしている  
すべてのひとびとに出会  
ってほしい貴重な作品で  
ある。（さいとう・ひで  
はる＝大阪労働学校・ア  
ソシエ学長・社会経済  
学）



一九世紀末以降、日本  
列島では産業革命が進展  
し、鹿児島・関西・関東  
の製紙・紡績業の興隆に  
ともなう女子労働力の供  
給源として、奄美群島の  
少女たちが身売りされ、  
過酷な労働を強いられ  
る。酷使に耐えかねた少  
女たちが逃亡して私娼化

する。島民の流民先は、  
日本列島だけではない。  
ブラジル、南洋群島、台  
湾、中国大陸各地への移  
住が進められる。帝国日  
本の植民地主義政策の先

★はらい・いちろう＝  
ジャーナリスト・雑誌  
「apuz」ライター。一九四  
九年徳島県生。奄美の日  
本復帰（一九五三年）直  
後、母方の故郷である奄  
美大島・名瀬へ移住。著  
書に『奄美の四季』『苦  
い砂糖』『欲望の砂糖史』  
『国境27度線』など。